杜甫の社會批判詩と房琯事件

谷口眞由實

一、はじめに

至德二載（七五七）四月、安祿山の亂のさなか、杜甫は虜囚となっていた長安から賊軍の目を盗んで脱出した。間道を拔けて鳳翔の行在所に驅けつけ、その功によって五月十六日、左拾遺の官を授けられる。

これに先立つ五月十日には宰相房琯が罷免されていた。[1] 左拾遺に任じられた杜甫は、上疏して房琯を救おうとして肅宗の逆鱗に觸れ、肅宗は詔によって三司に推問（取り調べ）を命じた。[2] 宰相張鎬の辯護により罪は免ぜられたが、翌年房琯が左遷されると、杜甫も房琯一派とみなされて、華州司功參軍に左遷された。杜甫が房琯を辯護して危うく罪に問われそうになり、やがて房琯一派として左遷されたこの一連の事件をここでは〈房琯事件〉と呼ぶこととする。

ではなぜ杜甫は房琯を辯護したのだろうか。①杜甫と房琯が以前から交友があったこと、②杜甫が任命された左拾遺は皇帝の過失を諫言する役目であり、着任早々の杜甫は使命感に燃え、また周圍の狀況を知らなかったこと、③房琯が宰相を罷免された理由が杜甫にはさほど重大でないと考えられたこと、などがこれまで指摘されてきた。①を理由としているのは主に『舊唐書』杜甫傳・『新唐書』杜甫傳である。

房琯布衣の時甫と善し。時に琯宰相爲り。自ら師を帥ゐて賊を討たんことを請ひ、帝之を許す。其の年十月、琯の兵陳濤斜に敗る。明年春、琯相を罷む。甫上疏して琯の才有りて、宜しく罷免すべからざるを言ふ。肅宗怒り、琯を貶して刺史と爲し、甫を出して華州司功參軍と爲す。（『舊唐書』卷一百九十下、杜甫傳）[3]

『新唐書』杜甫傳も類似した記述である。[4]

②を理由とするものは、たとえば吉川幸次郎著『杜甫詩注』第四册（卷四、前篇・はしがき一）[5] である。

これはいかにも杜甫的な行爲であった。およそ官界には慣例というものがある。任命匆匆の新參者が、こうした上奏をするということ自體、すでに慣例にはずれたであろう。またこの種の文書、體裁や措辭に慣例があったろうが、それにも慣れていたとは思えない。

また、③を理由とするものは、主に『新唐書』杜甫傳である。

甫上疏して言ふ「罪細にして宜しく大臣を免ずべからず」と。

いずれも一つの側面を語っていると思われる。しかし、以上の理由はいずれも情況説明であり、必ずしも杜甫が房琯を辯護した眞意を説明しているとは言い難い。さらに重大な理由があったのではないか、と

論者は考える。そこには、房琯の政策、さらには安祿山の亂を收束するための戰略への共鳴があったからではなかったか。拙論は、杜甫の房琯辯護の眞の理由について考察するとともに、あわせて杜甫にとっての〈房琯事件〉の意味について考える。その上で、〈房琯事件〉の後まもなく制作された杜甫の社會批判詩の代表作「三吏三別」詩が、どのような意味を持っていたのかを考察する。その鋭い社會批判や作品の根底に流れる杜甫の志向した理念に〈房琯事件〉が深く關っているのではないかという見通しについて考えたい。

二、事實としての房琯事件

まず、房琯事件に關する歷史書の記述を確認しておきたい。『舊唐書』卷一百一十一、房琯傳[6]には次のように記されている。

琯又多く病と稱し、時に朝謁せず、政事に簡惰なり。時議は兩京賊に陷り、車駕出でて外郊に次るを以ってす。天下の人心は惴恐し、主憂へ臣辱づるの際に當たり、此の時琯宰相爲り、略ぼ懈るに匪ざるの意無し。但だ庶子劉秩、諫議李揖、何忌等と高談虛論し、釋氏の因果、老子の虛無を說くのみ。此の外、則ち董庭蘭の琴を彈ずるを聽き、大いに琴客を招集して筵宴し、朝官往往庭蘭に因りて以って琯に見ゆ。是れ自り亦大いに貨賄を招納し、姦贓頗る甚し。（中略）憲司　又董庭蘭の貨賄を招納するを奏彈す。琯朝に入りて自ら訴ふ。上叱して之を出す。因りて私第に歸り、敢へて人事に關預せず。諫議大夫張鎬上疏して、言ふ、琯は大臣にして、門客贓を受くるも、宜しく累せらるべからずと。二年五月、貶せられて太子少師爲り。仍りて鎬を以って琯に代えて宰相と爲す。

『新唐書』卷一百三十九の房琯傳もほぼ同樣の記述である。新舊兩唐書に宰相を罷免された直接の理由としてあげているのは、次の二點である。第一に國家危急の時に、宰相でありながら、高談にうつつをぬかしていたこと。第二に、危急の時に琴の名手董庭蘭の琴を聞き、しかも房琯宅に出入していた董庭蘭が宰相への口利きの見返りとして賄賂を得ていたこと。この二點によって房琯は肅宗の不興を買い、至德二載（七五七）五月十日、宰相を罷免されて、太子少師に貶された、とされる。

また、新舊兩唐書および『資治通鑑』の記述から、これに先立つ前年十月、房琯が自ら兵を率いて長安を奪回することを願い出て、陳濤斜で戰って大敗を喫し、四萬餘人の兵を戰死させたことを罷免の遠因と考えることができる。さらにこれらの史書の筆者は次のように評している。

史臣曰く、（中略）琯相位に登り、將權を奪ひ、浮薄の徒を聚め、軍旅の事に敗れ、機を知らずして位に固くし、竟に德無く以て自ら危くす。（『舊唐書』卷一百一十一、房琯傳[7]）

琯遠器有り、（中略）而して事に切ならず。時に天下多故、謀略・攻取に急なり。帝吏事を以て下を繩し、而して琯相と爲り、遽に從容・鎭靜以て之を輔治せんと欲す。又人を知ること明らかならず、以て敗橈を取る。故に功名隳損すと云ふ。

贊に曰く、（中略）原ぬるに琯忠誼を以って自ら奮ひ、片言もて主を悟らしめて宰相を取る。必ず以て人に過ぐる有る者なり。用ふるに長ずる所に違ひ、遂に功を成す無し。然れども盛名の下、爲に居り難し。（『新唐書』卷一百三十九、房琯傳[8]）

これらの史書の作者はいずれも、房琯は學者として名聲があった

が、虚名が高いばかりで實を伴っていなかったのだと房琯の宰相起用そのものに冷ややかな評價を下している。以上が、『舊唐書』『新唐書』『資治通鑑』に見る房琯事件に關する記載である。

しかしこれらの批判では、房琯がどのような政策を懷いていたのかが全く顧みられていない。また、冒頭に指摘したように房琯罷免の理由も不明確である。新舊兩唐書や『資治通鑑』の筆者達は、一つの問題を見落としている。それは、どのように安祿山の亂を收拾するかという戰爭方針とそれを支える經濟政策について、肅宗と房琯が決定的に異なる戰略を持っていた、という點である。兩者の相違と對立は、西暦七五六年（天寶十五載。七月に改元して至德元載）の七月から十月にかけて、短期間のうちに回復不可能なものとなった。以下にその經過を簡單に追ってみる。

二、房琯事件の背景

房琯は西暦七五六年（玄宗の天寶十五載）七月十二日、長安を棄てて蜀へ逃れる途中の玄宗皇帝のもとに馳せ參じ、卽日吏部尙書、同中書門下平章事を拜した。そしてそのとき房琯は、安祿山に對する戰爭の根本的戰略として〈諸王分鎭〉の戰略を獻じた。わずか三日後の七月十五日、玄宗は〈諸王分鎭〉の計を詔書として下し、天下に示した。

秋、七月癸丑朔。（中略）甲子、次普安郡、憲部侍郎房琯自後至、上與語甚悅、卽日拜爲吏部尙書、同中書門下平章事。丁卯、詔以皇太子諱充天下兵馬元帥、都統朔方、河東、河北、平盧等節度兵馬、收復兩京、永王璘江陵府都督、統山南東路、黔中、江南西路等節度大使、盛王琦廣陵郡大都督、統江南東路、淮南、河南等路節度大使、豐王珙武威郡都督、領河西、隴右、安西、北庭等路節度大使。

（秋、七月癸丑朔。（中略）甲子、普安郡に次る。憲部侍郎房琯後より至り、上與に語りて甚だ悅び、卽日拜して吏部尙書、同中書門下平章事と爲る。丁卯、詔して皇太子諱を以って天下兵馬元帥に充て、朔方、河東、河北、平盧等節度兵馬を都統し、兩京を收復せしむ。永王璘は江陵府都督にして、山南東路、黔中、江南西路等節度大使を統べしめ、盛王琦は廣陵郡大都督にして、江南東路、淮南、河南等路節度大使を統べしめ、豐王珙は武威郡都督にして、河西、隴右、安西、北庭等路節度大使を領せしむ。）（『舊唐書』卷九、玄宗紀）

宰相就任早々、房琯の計策が採用されたのである。分鎭詔書の具體的內容は、皇太子を中心としながらも、基本的には諸王（永王・盛王・豐王）が連合して、唐王朝、および官軍の體制を建て直し、賊軍を包圍して孤立・瓦解させるという計策であった。『舊唐書』は、續けて次のように記している。

初、京師陷賊、車駕倉皇出幸。人未知所向、衆心震駭。及聞是詔、遠近相慶、咸思効忠於興復。

（初め、京師　賊の陷るところとなり、車駕　倉皇にして出幸す。人未だ向かふ所を知らず、衆心震駭す。是の詔を聞くに及んで、遠近相慶び、咸興復に忠を効さんと思ふ。）

安祿山の亂が勃發し、玄宗が蒙塵したとき、いわば置き去りにされた民衆は大混亂のさなかにあった。この詔書は、唐朝がなお國力を保ち再び天下を回復する實力と展望を持っていることを示し、その混亂を收めようとするものであった。そしてこの詔書によって、ようやく唐朝の側の軍民は落ち着きを取り戻したのである。このことからも、

房琯の戰略がこの時點で現實性と妥當性を持っていたことは明らかである。

房琯の戰略の妥當性とすぐれた可能性を史書の作者達は見落としている。だが宋の蔡居厚は、それを見落とさなかった人間のいたことを傳えている。『蔡寛夫詩話』[9]によれば、その人物とは晩唐の司空圖である。司空圖の「房太尉漢中」[10]詩に次のようにある。

物望傾心久　物望　心を傾くること久しく
兇渠破膽頻　兇渠　膽を破ること頻りなり

そして司空圖自身の自注に

祿山初見分鎮詔書、拊膺歎曰、吾不得天下矣。非琯無能畫此計者。
（祿山初めて分鎮詔書を見て、膺を拊ちて歎きて曰く、吾　天下を得ざらん。琯に非ずんば能く此の計を畫る者無からんと。）

という。玄宗が諸王分鎮の計を詔として下した時、安祿山はそれを見て、これで自分が天下を取ることはできないと歎き、このような計策を建てられるのは房琯をおいてないだろうと語ったというのである。これについて蔡居厚は、玄宗は蒙塵したとはいえ、諸王がそれぞれ天下の軍隊や權力を分ち統率したならば、民衆の心を固く繫ぎとめることができ、賊軍と强弱を爭うまでも無く勝利できるはずである（「蓋し以へらく乘輿播遷すと雖も、諸子各天下の兵柄を分統すれば、則ち人心固く繫ぐ所となり、未だ强弱を以って爭ふ可からざるなりと。」）と述べている。

さらに、「今唐史乃ち此の語を載せず。圖は博學多聞にして、嘗て朝廷に位し、且つ史を修す。其の言必ず自って來るところ有らん。」と指摘している。宋の程俱（致道）の『北山小集』に收める「房太尉傳論」や南宋の王應麟の『困學紀聞』卷十四[11]にもほぼ同趣旨の敍述が見える。王應麟がさらに『『新唐書』は野史稗說を采りて、此の語を載せず。唯だ程致道の論を著し之を發揚するのみ。」と指摘していることは注目に値する。

その後、肅宗が强引かつ變則的に卽位すると、房琯はそれを追認するしかなかった上皇（玄宗）からの卽位の册を奉じて肅宗のもとへ使いし、宰相として仕える。當初肅宗は、房琯の時事に對する言辭を聞き入れていたようだ。しかし、肅宗は次第に房琯の諸王分鎮の計に疑問を抱くようになった。そのきっかけは、至德元載十月（『資治通鑑』卷二百一十九[12]）、北海太守賀蘭進明が「論房琯不堪爲宰相對」（房琯の宰相爲るに堪へざるを論ずる對、『全唐文』卷三百四十六[13]）を奏上し、房琯の更迭を求めたことである。賀蘭進明は「論房琯不堪爲宰相對」の中で、次のように述べている。

琯昨於南朝、爲聖皇制置天下。乃以永王爲江南節度、潁王爲劍南節度。威王爲淮南節度。制云、命皇子北略朔方、命諸王分守重鎭。且太子出爲撫軍、入曰監國。琯乃以支庶悉領大藩、皇儲反居邊鄙。此雖於聖皇似忠、於陛下非忠也。琯立此意以爲聖皇諸子但一人得天下、卽不失恩寵。
（琯　昨南朝において、聖皇の爲に天下に制置す。乃ち永王を以って江南節度と爲し、潁王を劍南節度と爲し、威王を淮南節度と爲す。制に云ふ、皇子に命じて北のかた朔方を略らしめ、諸王に命じて重鎭を分守せしむと。且つ太子は出でては撫軍と爲し、入りては監國と曰ふ。琯は乃ち支庶を以って悉く大藩を領せしめ、皇儲をして反って邊鄙に居らしむ。此れ聖皇においては忠に似たりと雖も、陛下においては忠に非ざるなり。琯の此の意を立つるは以爲く聖皇の諸子　但だ一人天下を得ば、卽ち恩寵を失はざらん

と。）

まず諸王分鎮の計が上皇の下で策定されたこと、世繼ぎである肅宗には邊鄙なところを振り當て、皇太子以外の諸王には大藩を領有させていることを述べた後、房琯を謗っている。房琯は肅宗に誠心をつくさず、上皇＝玄宗に忠義顔をしている、どの王子でも勝利した曉には自分が利を得られるようにもくろんでいる、と言い切っている。おそらく肅宗は、卽位の時點で、諸王と連合してではなく、つまり諸王の一人としてではなく、肅宗單獨の力で賊軍に勝利することを決意していただろう。肅宗の卽位が變則的であればあるほど、肅宗は單獨で、至急に、しかも壓倒的に勝利しなければならなかった。

房琯を非難した賀蘭進明は、第五琦からの經濟的バックアップを背景に軍功をあげてきており、肅宗に諸王の一人としてではなく單獨で勝利をめざす計略をすすめた。ここで、第五琦と賀蘭進明、その計略を受け入れた肅宗と、房琯の諸王分鎮の計との對立が浮かび上がってくる。[14] 肅宗の單獨勝利の戰爭方針と、肅宗および諸王が結束し連合して勝利をめざす戰略との對立である。その戰爭方針の違いは、それに連動する經濟政策の對立に發展する。

第五琦は、若い頃から富國强兵の術があると自任し、賀蘭進明によってその才を認められ、安祿山の亂の勃發を機に賀蘭進明との結びつきを深めていった人物である。至德元載（七五六）十月、第五琦は肅宗に彭原で見え、

請以江淮租庸市輕貨、泝江漢而上至洋川、令漢中王瑀陸運至扶風以助軍。上從之。尋加琦山南等五道度支使。琦作榷鹽法、用以饒。

（請ふ江淮の租庸を以って輕貨を市ひ、江漢を泝り上りて、洋川に至り、漢中王瑀をして陸運して扶風に至らしめ、以って軍を助けん。上之に從ふ。尋いで琦に山南等五道度支使を加ふ。琦榷鹽法を作り、用以って饒かなり）。（『資治通鑑』卷二百一十九）

第五琦は軍事費の調達が急務であると說き、江淮地方からの賦稅を貨幣に換えてそれを調達することを勸め、自らその職を願い出たのである。肅宗はそれを認め、彼を監察御史、江淮租庸使に任じた。租庸使は開元十一年に租庸地稅使に始まる官で、前任は楊國忠であった。

この時肅宗に仕えていた房琯は、帝が第五琦の政策を採用したこと、彼を重く取りたてたことを諫めて次のように述べている。

中書侍郎房琯諫曰、往者楊國忠厚斂、取怨天下。陛下卽位以來、人未見德。琦聚斂臣也。今復寵之、是國家斬一國忠、而用一國忠矣。將何以示遠方、歸人心乎。上曰、天下方急、六軍之命若倒懸、無輕貨則人散矣。卿惡琦可也。何所取財。琯不能對。自此恩減於舊矣。

（中書侍郎房琯諫めて曰く、往者楊國忠は厚く斂し、怨みを天下に取る。陛下卽位して以來、人未だ德を見ず。琦は聚斂の臣なり。今復た之を寵さば、是れ國家一國忠を斬りて、一國忠を用ふるなり。將に何を以って遠方に示して、人心を歸せんとするかと。上曰く、天下方に急にして、六軍の命倒懸の若く、輕貨無くんば則ち人散ぜん。卿琦を惡むは可なり。何れの所にか財を取ると。琯對ふる能はず。此れより恩舊より減ず。）（『唐會要』卷八十四、租庸使）

房琯は第五琦を楊國忠になぞらえ、「聚斂の臣」と評している。中興を期す肅宗政權にとって、民心の安定こそ必要である。爭亂の中で以前楊國忠が行ったように稅を重く取りたてれば、民心を不安定にさせかねないと房琯は考えて諫めた。

しかし、肅宗は聞き入れなかった。單獨勝利を急ぐ肅宗は第五琦の政策を必要とした。第五琦は至急に軍費を生み出すため、矢継ぎばやに新しい手段を採用した。第五琦の經濟政策をまとめておくと次のようになる。

①江淮の租庸を賣って輕貨を買い、軍事費に當てる。

②榷鹽法（鹽の專賣制）を實施する（乾元元年（七五八）に第五琦によって始められた）。

③銅貨の改鑄を行う。乾元元年七月には乾元重寶（一當十錢）を鑄造。次いで乾元二年、第五琦が宰相となると乾元錢（一當五十錢）の鑄造を申し出た。[15]

第五琦はいわば經濟官僚であり、彼の打ち出した政策は安祿山の亂の混亂の中でどうやって民衆から税を取りたて、軍費をどのようにして調達するか、という問題を解決しようとするものであった。中唐の兩税法への過渡期的な政策といえる。彼は、經濟官僚として帝の信頼を得て、戸部侍郎、兼御史中丞、專判度支、領河南等支度都勾當轉運租庸鹽鐵鑄錢、司農太府出納、山南東西江西淮南館驛等使をへて、乾元二年、ついに同中書門下平章事を加えられるにいたる。

しかし、軍費を調達するという點では、彼の政策は「成功」したのではあったが、民衆の生活や經濟活動への顧慮が全く缺如していた。『舊唐書』第五琦傳によれば、先述の政策③は弊害が最も大きかった。

既而穀價騰貴、餓殣、死亡、枕藉道路、又盜鑄爭起、中外皆以琦變法之弊、封奏日聞。

（既にして穀價騰貴し、餓殣・死亡せるもの道路に枕藉す。又、盜鑄爭ひ起こり、中外皆琦の變法の弊を以って、封奏日々聞こゆ。）

激しい穀物の騰貴、インフレを招き、民衆の餓死者が枕を連ねるありさまであった。

以上のように、現實の動きは、賀蘭進明、第五琦によって案出され、肅宗によって採用された戰爭方針・經濟政策が實行された。だが、歴史に「もしも」はないが、房琯の計策も當時十分妥當性を持ち、ありえたものだったといえよう。つまり房琯は、第一に肅宗をはじめ諸王が結束・團結し、分鎮することによって、賊軍を包圍すること、第二に堅守防衛を旨とし、賊軍を自己崩壞に持ち込むこと、第三に民生と民心の安定を圖るため、民衆への負擔增を回避すること、を戰略・政策として考えていた。だが結局肅宗は、別の政策を取るに至る。第一に、肅宗單獨による勝利をめざすこと、第二に、賊軍に對し、積極攻勢をはかること。そのためには、兵力・財力の大量投入もやむを得ないとすること、第三に、そのための兵力・財力を得るため、新たな增税、貨幣改鑄、專賣制などの經濟政策を推進すること、であった。

この政策の相違、對立こそが、宰相房琯罷免の最大の、そして本當の要因と考えられるのである。

三、杜甫にとっての房琯事件の意味

さて、ともかくその房琯罷免に對して、杜甫は命懸けで反對した。肅宗は激怒し、三司に推問を命じたが、韋涉や張鎬の辯護により、辛うじて罪を赦された。この時（六月一日）杜甫が謝意を述べた「奉謝口勅放三司推問狀」（口勅もて三司の推問を放さるるに謝し奉る狀）には、次のように述べている。

右臣甫、智識淺昧、向所論事、涉近激訐、違忤聖旨。（中略）竊見房琯、以宰相子、少自樹立、晚爲醇儒。有大臣體。時論許琯、

必位至公輔、康濟元元。陛下果委以樞密、衆望甚允。觀琯之深念主憂、義形於色。況畫一保泰、其素所蓄積者已。而琯性失於簡、酷嗜鼓琴。董庭蘭今之琴工。遊琯門下有日。貧病之老、依倚爲非。琯之愛惜人情、一至於玷汙。臣不自度量、歎其功名未垂、而志氣挫衂。覬望陛下棄細錄大。所以冒死稱述。何思慮未竟、闕於再三。陛下貸以仁慈、憐其懇到、不書狂狷之過、復解網羅之急。是古之深容直臣、勸勉來者之意。

（右臣甫は、智識淺昧にして、向に論ずる所の事、激訐に渉近し、聖旨に違忤す。（中略）竊かに房琯を見るに、宰相の子なるを以って、少くして自ら樹立し、晩に醇儒と爲る。大臣の體有り。時論琯に許すに、必ず位は公輔に至り、元元を康濟せんと。陛下果たして委ぬるに樞密を以ってし、衆望甚だ允す。琯の深く主の憂ひを念ふを觀るに、義は色に形る。況んや一を畫くがごとく保泰すること、其れ素より蓄積する所の者なるのみ。而れども琯性簡に失し、酷だ琴を鼓すを嗜む。董庭蘭は今の琴工なり。琯の門下に遊びて日有り。貧病の老にして、依倚して非を爲す。琯の人情を愛惜すること、一に玷汙に至る。臣自ら度量せず、其の功名の未だ垂れずして、志氣の挫衂せんことを歎く。陛下の細を棄てて大を錄さるることを覬望す。死を冒して稱述せし所以なり。何ぞ思慮の未だ竟きず、再三に闕けたるや。陛下　貸すに仁慈を以ってし、其の懇到なるを憐れみ、狂狷の過ちを書せず、復た網羅の急なるを解く。是れ古の深く直臣を容れ、來者を勸勉するの意なり。）（『杜詩詳註』卷之二十五）

ここには、謝罪の言葉も述べられてはいるが、房琯を辯護した理由とその正當性の主張がむしろ言葉を盡して述べられている。ことに强調されているのは、房琯には大臣の風格があり、時論も彼が宰相となって民衆を「康濟」することを期待していたことである。そして、宰相として囑望される房琯が、些細な罪のために道半ばで挫折するのが殘念だから死を冒して諫言に及んだと述べている。反省の言葉というよりは、自身を「狂狷」と稱しながら、房琯辯護の正當性が强調されている。杜甫の房琯へのなみなみならぬ期待と共感を讀み取ることができる。杜甫が房琯に見ていたのは、「康濟元元」（元元を康濟）し、天下を「保泰」しようとする房琯の前述の政策であっただろう。杜甫が自らを「直臣」、「狂狷」に比しているのは自身の無謀を意識していた現われである。「直臣」は、君主をもはばからず直言していさめる臣下を意味し、また「狂狷」は『論語』[18]に見える言葉であり、首尾一貫した激しい行い・態度を言う語である。つまり、杜甫は無謀を自覺しながら房琯辯護という行動に及ばざるをえないと考えたのである。このことから、戰爭というぬきさしならない情況下で民衆の生活を守らねばならないという問題意識が、杜甫のなかに切迫したかたちで浮かび上がってきていたことが分かる。

また、後年房琯沒後に杜甫が制作した「祭故相國清河房公文」（故の相國清河房公を祭る文）においても、やはり杜甫が房琯の政策を支持し、それゆえ命懸けで房琯を辯護したこと、それにもかかわらず諫言が帝に聞き入れられなかったことを恥じ、無念に思う心情が述べられている。

…太子卽位、揖讓倉卒。小臣用權、尊貴倏忽。公實匡救、忘餐奮發。累抗直詞、空聞泣血。時遭祲沴、國有征伐。車駕還京、朝廷就列。盜本乘弊、誅終不滅。高義沉埋、赤心蕩折。貶官厭路、讒口到骨。致君之誠、在困彌切。（中略）拾遺補闕、視君所履。公

初龍印、人實切齒。甫也備位此官、蓋薄劣耳。見時危急、敢愛生死。君何不聞、刑欲加矣。伏奏無成、終身愧耻。乾坤慘慘、豺虎紛紛。蒼生破碎、諸將功勳。

（…太子卽位し、揖讓すること倉卒たり。小臣　權を用ひ、尊貴倏忽たり。公實に匡救せんとし、餐を忘れて奮發す。累ねて直詞を抗げ、空しく泣血を聞す。時に祲沴に遭ひ、國征伐有り。車駕京に還り、朝廷列に就く。盜は本弊に乘じ、誅するも終に滅びず。高義沉埋し、赤心蕩折す。官を貶され路を厭がれ、讒口骨に到る。君に致すの誠、困に在りて彌々切なり。（中略）拾遺・補闕、君の履む所を視る。公初めて印を寵めんとするや、人實に切齒す。甫や位を此の官に備へらるるも、蓋し薄劣なるのみ。時の危急を見ては、敢へて生死を愛しまんや。君何ぞ聞かざる、刑加へられんと欲す。伏奏するも成る無く、終身愧耻す。乾坤慘慘たり、豺虎紛紛たり。蒼生破碎せられ、諸將功勳あり。）（『杜詩詳註』卷之二十五）[17]

この文章をみても、後年に到るまで、杜甫が房琯を支持し續け深く敬愛していたことが分かる。それは房琯の高い道義に對してでもあるが、その最大の理由は、「蒼生」つまり民衆の生活を守りながら傾いた唐王朝を再建しようとした房琯の政策であった。

先述の「奉謝口勅放三司推問狀」に述べているように杜甫は「聖旨」に逆らうことを覺悟して房琯を辯護したのではあったが、杜甫の意見は聞きいれられなかった。その後、おそらくこの件がもとで、杜甫は肅宗から疎んじられた。

四、社會批判詩「三吏三別」

乾元元年（七五八）六月、杜甫は房琯とその黨派とみなされた劉秩・嚴武らとともに左遷され、華州司功參軍に出された。左遷された後も、杜甫は房琯事件によって深まった問題意識を抱き續けたと考えられる。同年の著「乾元元年華州試進士策問五首」は、その中で賦役・徵兵・水利・幣制などを論じ、特に戰亂下にあって人民の負擔をいかに輕減するかというさしせまった難問を提起している。このことから、房琯の政策を支持した杜甫の問題意識が一貫して保たれていたことは確かだと思われる。杜甫の社會批判詩の代表作とされる「三吏三別」（「新安吏」「潼關吏」「石壕吏」から「新婚別」「垂老別」「無家別」にいたる六首の連作）は、その問題意識が動機となって創作されたと考えられる。「三吏三別」は、その年の暮れ（十二月）に華州から洛陽に赴いていた杜甫が、翌乾元二年春三月に華州へもどる歸途の見聞を作品にしたとされる。折から、郭子儀ら九節度使が相州（鄴城）に安慶緒・史思明を攻擊して敗れ、河陽で軍の建て直しをはかっていた。

「三吏三別」は、盛唐までの詩にかつて類を見ない痛烈な社會批判を詠じた詩である。「三吏三別」の意味や位置づけについては、既に論じ盡くされているとも言えるが、今それに付け加えたいのは、第一に、これらの批判が（房琯事件）を契機に鮮明になった肅宗政府の具體的な經濟政策や戰爭戰略への切實な批判、という性格を强く持っていることである。第二にその批判を展開することが、杜甫にとって同時に自己の視點を根本的に問い直すこととなった、ということである。

馮至は「この六首は、單純に人民の苦惱を反映しているばかりでなく、さらに深刻に作者の心のうちにある矛盾をも表現したのであっ

た。…封建社會における人民を愛し祖國を愛する詩人が人民と支配者の間にあって感じた烈しい衝突である」（『杜甫―詩と生涯―』橋川時雄譯、筑摩書房、一九七七年）と評している。また鈴木修次氏は「三吏三別」を「報道文學」と位置づけ、「杜甫の社會詩のなかで、これほどすぐれた劇的構成と展開とをくふうした作品はほかになく、また、これほど歴史的現實の世情をあばき出し、リアルに説明しきった作品はほかにない」（『唐代詩人論』、鳳出版、一九七三年）、と作品に卽した鋭い指摘をしている。また、「はじめは體制の側にあった詩人の目が、しだいに體制からはずれ、最後にいたっては體制への批判者としての位置にたつ」（同前書）と杜甫の視點についても言及している。いずれも卓越した讀み方と考えられるが、前者の馮至の讀みでは、杜甫は明確な政治方針を持たない單なる同情者にとどまり、杜甫自身の苦惱が語られるだけになってしまうと思われる。つまり、現實の下で杜甫がどのような姿勢で政策批判を行っていたかが見落とされている。またそれ以上に、民衆の「苦惱」が受動的なものとしか捉えられていないように思われる。また、鈴木氏の論は、作者の視點の問題を提起した重要な見方である。しかし、「歴史的現實の世情をあばき出し、リアルに説明し」たという指摘から分かるように、あくまでも民衆のすがたを外側から描いた作品と判斷しているように思う。それらの見解に對して、論者は、「三吏三別」の眞の價値は、もうすこし別の點にあると考える。

以下に、「三吏三別」の作中の〈語り手〉に着目しながら杜甫の問題意識のあり方を考察し、さらに〈房琯事件〉との關連で浮かびあがることがらについて、問題點を指摘したい。

「新安吏」には、冒頭に鄴城敗北後の中男の徵兵のありさまが描かれている。

客行新安道　喧呼聞點兵
借問新安吏　縣小更無丁
府帖昨夜下　次選中男行
（中略）
況乃王師順　撫養甚分明
送行勿泣血　僕射如父兄

客は行く　新安の道
喧呼　點兵を聞く
借問す　新安の吏に
縣小にして更に丁無し
府帖　昨夜下り
次選　中男行く
況んや乃ち　王師の順にして
撫養すること甚だ分明なるをや
送行して泣血する勿れ
僕射は父兄の如し

馮至や郭沫若はこの詩の末尾を齒切れの悪いなぐさめと捉えている。「只是對于受難者一味的勸解和安慰。故詩人的同情、應該説是廉價的同情。」（『李白與杜甫』郭沫若著、人民文學出版社、一九七一年）。つまり知識階級の中途半端で獨善的な同情と解している。しかし、この詩は相州での官軍の潰滅・敗走という展開をふまえ、東都防衛に戰況が轉じていることを背景として語られている。引用で省略した部分は、相州では攻擊であったが、今度は「就糧」「練卒」「掘壕」「牧馬」する洛陽を守る戰さが始まることが述べられている。注目されるのは、杜甫の原注に「收京後の作。兩京を收むと雖も、賊は猶ほ充斥す」とあることである。兩京が回復された至德二載十一月から、まだ一年數ヶ月しかたたないうちに、また國都が危機に瀕しているのであり、切迫した情況の中でも、國都を防衛しなければならないという課題に直面していた。だからこそ安祿山の亂勃發當初の轍をふむことな

く、堅守防衛に徹することを〈語り手〉に改めて主張させているのである。末尾の二句は、中途半端な慰めではなく、厳しい戦いに向かう民衆へのはげましであり、かつまた、その防衛の戦いにかすかな希望が有ることを述べているのである。

ところで、ここで〈語り手〉は「客」と表現されている。「新安の道」を「行」き、點呼の聲を「聞」いて、「客」が新安の吏に「借問」するという構成である。ここでは、借問された「吏」の答えの言葉は「縣小にして更に丁無し。府帖　昨夜下り、次選　中男行く」の三句のみであり、その他すべてが、〈語り手〉によって語られていると考えられる。〈語り手〉、つまり「客」は、前半では吏に「借問」し、中間および後半では、民衆に對して「莫自使眼枯」「收汝淚縱横」「送行勿泣血」と禁止や命令の形で呼びかけ、しかも民衆を「汝」と二人稱（對稱）で呼んでいる。このことから、〈語り手〉は民衆・吏に對して、上の位置から、しかも距離をおいて見ているように思われる。つまり、この作品では、作者とごく近い位置に〈語り手〉＝「客」が設定され、その〈語り手〉の視線から見下ろすように捉えられた情況が詠じられているのである。その民衆描寫は、あくまでも外面的・客觀的なものだといえる。

「潼關吏」では、潼關の修築の現場が描かれている。

士卒何草草　　士卒　何ぞ草草たる
築城潼關道　　築城す　潼關の道
大城鐵不如　　大城は鐵も如かず
小城萬丈餘　　小城は萬丈餘
借問潼關吏　　潼關の吏に借問すれば
修關還備胡　　關を修めて還た胡に備ふと

ここでも〈語り手〉は「吏」に借問している。そしてその「吏」は、〈語り手〉（すなわち「我」）に關の威容を見せた後、こう語る。

胡來但自守　　胡來たらば但だ自ら守り
豈復憂西都　　豈に復た西都を憂へしめんや
丈人視要處　　丈人　要處を視よ
窄狹容單車　　窄狹　單車を容るるのみ

「吏」は〈語り手〉を「丈人」とよんでいる。「丈人」とは、年長の尊者を稱する語であり、このことから、「新安吏」と同様に、〈語り手〉が「吏」から見て目上の存在として設定されていることがわかる。

末尾には、かつて哥舒翰が潼關から出撃して桃林の戦いで大敗したことに觸れた後で、

請囑防關將　　請ふ　防關の將に囑せん
愼勿學哥舒　　愼んで哥舒に學ぶ勿れ

と言っている。堅固な關を築いた以上、固く守って、哥舒翰の二の舞にならないように、と〈語り手〉は吏に防關の將への傳言を託している。すでに王嗣奭が『杜臆』で指摘しているように、杜甫の意圖は哥舒翰一人の責任を追及するものではない。『杜臆』によれば、哥舒翰が潼關によって堅守していた時に、出撃と積極攻勢を强要して大敗を招く原因を作った楊國忠を批判しているのである。

つまり「新安吏」と「潼關吏」は、ほとんど同じ構造を持っている。それは、〈語り手〉が吏・民衆を高所から見下ろすという位置に立っていることであり、また堅守防衛という戦爭政策の主張（裏返せば積極攻勢に固執する肅宗政府への批判）である。

だが、「石壕吏」では、「吏」は上記二首とはかなり違う描きかたがなされている。

暮投石壕村　暮れに投ず　石壕村
有吏夜捉人　吏有り　夜人を捉ふ
老翁踰牆走　老翁　牆を踰えて走り
老婦出看門　老婦　出でて門に看る
吏呼一何怒　吏の呼ぶこと一に何ぞ怒れる
婦啼一何苦　婦の啼くこと一に何ぞ苦しき
聽婦前致詞　婦の前んで詞を致すを聽くに
三男鄴城戍　三男は鄴城の戍り
一男附書至　一男　書を附して至り
二男新戰死　二男　新たに戰死すと
存者且偸生　存者は且く生を偸むも
死者長已矣　死者は長へに已みぬ
（中略）
老嫗力雖衰　老嫗　力衰ふと雖も
請從吏夜歸　請ふ　吏に從ひて夜歸せん
急應河陽役　急に河陽の役に應ずれば
猶得備晨炊　猶　晨炊に備ふるを得ん
夜久語聲絶　夜久しうして語聲絶え
如聞泣幽咽　泣いて幽咽するを聞くが如し
天明登前途　天明　前途に登りしとき
獨與老翁別　獨り老翁と別る

この作品では、〈語り手〉は「客」とか「丈人」とかいう具體的存在としては現われてこない。主語を持たない冒頭の「暮投石壕村」の句が明らかに示しているように、この詩の〈語り手〉は主語として實體化されない「私」である。しかも、〈語り手〉が直接語る部分は冒頭の七句、および末尾の四句にすぎない。「聽婦前致詞」や「如聞泣幽咽」の句が示すように、他はそこに居合わせて見聞きしたそのままを語ったとでもいうほかない構成となっている。「新安吏」「潼關吏」に比較して、〈語り手〉の存在が一歩背景に退いているのである。「新安吏」「潼關吏」では「吏」の上の位置に立って「吏」と語り合い、民衆に呼びかけたりしていた〈語り手〉が、ここでは影の薄い存在となり、かわって「老嫗」が民衆の視線と言葉で語っている。

そして、前述の「新安吏」「潼關吏」では堅守防衛という、いわば戰爭政策についての主張がなされていたが、ここでは、民衆とより深く關わる徵兵・徵發の問題に目が向けられている。ここでの「吏」は、「有吏夜捉人」、「吏呼一何怒」のように、情け容赦なく民衆を徵兵・徵發する存在として描かれている。一方、この作品ではむしろ中心的登場人物ともいえる「老嫗」は、これとは對照的に、息子や「老翁」の徵兵・徵發に心を痛めながら、思いやりや愛情に滿ちた存在である。抜き差しならない場面で、人間らしさを喪失せずに生きている民衆の氣高さと、人間性の見えない「吏」の卑小さとを〈語り手〉は對照的に語ったといえよう。前二作では、民衆の描寫は外面的・客觀的描寫にとどまっていたが、「老嫗」を媒介として民衆の捉え方が深まり、また具體的なものとなっている。このことは〈語り手〉の問題とも深く關わっている。彼女の言葉によって、「老嫗」の家族の悲劇と「老嫗」の氣高さを影の薄い〈語り手〉は知り、彼女が「吏」によって戰場へ連れ去られて行くという過酷な運命を見る。作者は實は、「老嫗」の發言を生み出すことによって、逆に民衆自身の境遇を體驗しているのである。

「石壕吏」の結び二聯では、旅立つ〈語り手〉の後ろ姿が印象的だ

が、それはつまり官の側に立脚した〈語り手〉が舞臺から退場する姿と解することができよう。言い換えれば、〈語り手〉として杜甫の等身大に近かった「客」や「丈人」の視點は消えてゆき、かわって民衆自身の視點というべきものが生まれ出てきているのである。

さらに「三吏三別」を全體としてながめるとき、「石壕吏」が結節點となっていることがわかる。「新安吏」「潼關吏」では、肅宗の戰爭政策への批判・堅守防衞の主張が作者と等身大の〈語り手〉によってなされていた。しかし、「石壕吏」においては、民衆自身の視點で民衆の生活の實態が語られ始め、同時に民衆の人間性と內面が浮かびはじめる。

次に「三別」を見てゆきたい。「新婚別」の冒頭二句は、すでに指摘されているように『詩經』の興の手法に似ている。いわば客觀的な詠じ方であるが、三句以降の全篇を通じて、「妾」・「我」と稱する新婚の妻の一人稱による語りに轉じており、出征する夫を「君」と表現している。つまり、新婚の妻という〈語り手〉の見送る側の視線で捉えられていることがわかる。新婚直後にもかかわらず、夫を戰地に送り出さねばならない場面に直面して、搖れ動く〈語り手〉の內面が語られ、その健氣な姿が浮彫りになっている。

「垂老別」では、徵兵される老人自身の言葉によって一篇を描いている。〈語り手〉である主人公の老人は、老いに加えて、子孫が皆戰死しているという境遇にある。その上、自ら老妻を殘して出征する別れなのである。「新婚別」が見送る側の視點だったのに對して、見送られる側の視線から見た徵兵の問題が捉えられている。

何鄉爲樂土　何れの鄉か　樂土爲る
安敢尙盤桓　安んぞ敢へて尙盤桓せん

一體、安樂の地などどこにあるものか。どうしてここにぐずぐずしておれようか。「何鄉爲樂土」という老人のことばは、『詩經』「碩鼠」を踏まえ、天下中どこもかしこも戰亂に荒廢し、しかも嚴しい稅の取り立てと徵兵が課せられているということを表したものである。もはや前線だけでなくこの生活の場それ自體が崩れ落ちていることが明示されている。自分が反對した肅宗政府の戰爭・經濟政策によって、民衆の生活が今杜甫の目の前で崩壞していることを、この老人の視點によって切實に捉え直しているのである。それは、老人＝〈語り手〉、すなわち民衆の視線で捉えて始めて深刻な事實として明白になった實相である。しかも、この老人の存在は尊嚴に滿ちている。「老妻臥路啼、歲暮衣裳單。孰知是死別、且復傷其寒。此去必不歸、還聞勸加餐。」と老妻を氣遣いつつ、「勢異鄴城下、縱死時猶寬。人生有離合、豈擇垂老端。」と自らに言い聞かせて戰地へ赴こうとしている。ここにも、民衆の苦惱のみでなく、その內面の尊嚴が現われているのである。

「無家別」は、家族を失って天涯孤獨となり、その出征を誰一人見送る者さえない男の語りでつづられている。しかも「新婚別」「垂老別」にわずかに見られた妻や夫への語りかけの言葉もない。全くの獨白というスタイルをとっている。〈語り手〉の男は自分を「我」（四回）「賤子」と一人稱で語っている。「我」という語が幾度も繰り返されていることは、彼の孤獨感を反映しているだろう。

寂莫天寶後　寂莫たり　天寶の後
園盧但蒿藜　園盧　但だ蒿藜のみ
我里百餘家　我が里の百餘家
世亂各東西　世亂れて各東西す
存者無消息　存する者は消息無く

死者爲塵泥　死せる者は塵泥と爲る
賤子因陣敗　賤子　陣敗に因り
歸來尋舊蹊　歸り來りて舊蹊を尋ぬ
（中略）
縣吏知我至　縣吏　我の至るを知り
召令習鼓鞞　召して鼓鞞を習はしむ
雖從本州役　本州の役に從ふと雖も
內顧無所携　內に顧れば携ふる所無し
近行止一身　近く行くも止だ一身
遠去終轉迷　遠く去くも終に轉た迷はん
家鄉既盪盡　家鄉　既に盪盡し
遠近理亦齊　遠近　理も亦た齊し
永痛長病母　永く痛む　長く病みし母の
五年委溝溪　五年　溝溪に委ねしを
生我不得力　我を生むも力を得ず
終身兩酸嘶　終身　兩つながら酸嘶しき
人生無家別　人生　家無く別る
何以爲蒸黎　何ぞ以って蒸黎と爲さん

中間部「雖從本州役」から「遠近理亦齊」までの六句には、復員後すぐにまた徵發されるこの男の內面のせめぎあいが語られる。それに續いて、母の弔いさえできず、生前も力になれなかった後悔が述べられている。これはこの男自身の內面に根ざした慟哭である。この男は見送られることさえないのだが、自分の死への不安などを述べるのではなく、母をいつくしむことができなかったという事實にこだわっている。そこに人としての氣高さが輝いているといえよう。つまり、〈語り手〉の視線を通じて、民衆の內面の眞實が捉えられている。そしてそのことこそが、本質的に政府の民衆不在の政策を民衆のまなざしからあぶり出しているのである。

人としてこの世に生をうけて、見送ってくれる家族もない別れをして出征する。これでどうして「蒸黎」、すなわち民衆と言えようか。末尾のその問いは、誰の言葉なのだろうか。作品に卽していえば語り手の男の言葉としか解することはできない。しかし、「蒸黎」という言葉は、司馬相如の「封禪文」に見える言葉である。

宛宛黃龍、興德而升。采色炫燿、煥炳煇煌。正陽顯見、覺悟黎蒸。
（宛宛たる黃龍、德に興りて升る。采色は炫燿し、煥炳として煇煌たり。正陽は顯見して、黎蒸を覺悟す）。（『文選』卷四十八）

このことから明らかなように、これは本來知識人の使う言葉である。この口調には、杜甫の肉聲がかすかに感じられる。「三別」は一貫して、登場する民衆の視線と言葉で語られてきた。だが、彼らとともに作中の現實を體驗している〈作者〉が、やはり一貫して存在していたことが、最後の一語からかすかに感じられるのである。

以上「三別」の作品を見てきたが、新婚の妻、出征する老人、家族のない男がそれぞれの〈語り手〉であり、それは杜甫が、いずれも民衆の生活を民衆の側から捉え直すべく生みだしたものだといえる。「三吏三別」、ことに「石壕吏」および「三別」は、民衆の視線から民衆の實態とその內面を捉え直す試みであった。それを通して、肅宗政府の政策の誤りが民衆の生活にもたらしたものをリアルに、しかも切實なものとして描き出し、その戰爭政策や經濟政策への批判を鋭いものにしているのである。

四、おわりに

以上の論點をまとめると次のようになる。杜甫は以前から「兵車行」に見えるように民衆への關心を持っていたが、〈房琯事件〉を經て、民衆への關心がより具體的・先鋭になっていった。さらに、房琯の政策・戰略を支持し辯護した經驗を通じて、現實の政策を通して政治的責任を果たさなくてはならない、という官僚としての責任感を强めていった。杜甫の政治意識は觀念的な理想論だとする從來の見方はこの點を見落としている。しかし、實際には房琯・杜甫の政策は採用されず、第五琦・賀蘭進明の〈肅宗單獨勝利・積極攻勢・增稅・貨幣改鑄〉の方針が採用され、それが現に農村を崩壞させていくのを目の當たりにし、彼の中に、今まで以上に具體的で深刻な社會批判が芽生えた。同時に民衆の生活への注目が深まり、それが民衆自身の視線で現實を見、語ろうとする文學的な試みへと杜甫を導いたのである。

「三吏」「三別」では、前者では主に官の側に、後者では民衆の側に視點を設定し、しかもそれぞれの情況を一番リアルに傳えることのできる〈語り手〉を登場させて詠じきっている。その結果、ただ民衆の苦惱を客觀的、外面的に描くというレベルにとどまらず、民衆の內面の主體的で尊嚴に滿ちたせめぎあいが浮彫りになった。そのことこそが、「三吏三別」の到達點である。それは〈房琯事件〉を契機として深まった問題意識—戰爭情況下で現實に民衆を救わなくてはならないという問題意識—が杜甫の中にもたらしたものなのである。

註

(1) 近年、房琯について相次いで論考が出されている。「房琯行年考」(陳冠明著、『杜甫研究學刊』一九九八年第一期、總第五五期、四川省杜甫學會・成都杜甫草堂博物館發行)、「房琯行年考(續)」(『杜甫研究學刊』一九九八年第二期、總第五六期、同右發行)は、房琯の生涯にわたり詳細な調査・記述がなされている。この他、「論杜甫與房琯」(沈元林著、『杜甫研究學刊』一九九〇年第二期、同右發行)、「杜甫與房琯」(『杜詩雜說』曹慕樊著、一九八一年、四川人民出版社)などがある。また、吉川幸次郎著『杜甫詩注』第四册(筑摩書房、一九八〇年七月)の「はしがき一」にも房琯の人物および杜甫との關係について詳述している。

なお、杜甫の詩文の引用には『杜詩詳註』を用い、『舊唐書』『新唐書』『資治通鑑』『唐會要』『全唐詩』はいずれも中華書局版を使用した。

(2) 『新唐書』卷二百一、杜甫傳には次のように記されている。

至德二年、亡走鳳翔上謁、拜右拾遺。與房琯爲布衣交、琯時敗陳濤斜、又以客董廷蘭、罷宰相。甫上疏言「罪細、不宜免大臣。」帝怒、詔三司雜問。宰相張鎬曰「甫若抵罪、絶言者路。」帝乃解。甫謝、且稱(中略)、然帝自是不甚省錄。時所在寇奪、甫家寓鄜、彌年艱窶、孺弱至餓死、因許甫自往省視。從還京師、出爲華州司功參軍。

ただし、引用文中、「右拾遺」は、「左拾遺」の誤りであり、「孺弱至餓死」はこの時期のことではない。また、「雜問」を杜甫の「奉謝口勅放三司推問狀」では「推問」に作っている。

(3) 房琯布衣時與甫善。時琯爲宰相。請自帥師討賊、帝許之。其年十月、琯兵敗於陳濤斜。明年春、琯罷相。甫上疏言琯有才、不宜罷免。肅宗怒、貶琯爲刺史、出甫爲華州司功參軍。

(4) 註(2)參照。

(5) 註(1)參照。

(6) 琯又多稱病、不時朝謁、於政事簡惰。時議以兩京陷賊、車駕出次外郊。天下人心惴恐、當主憂臣辱之際、此時琯爲宰相、略無匪懈之意。但與庶子劉秩、諫議李揖、何忌等高談虛論、說釋氏因果、老子虛無而已。

此外、則聽董庭蘭彈琴、大招集琴客筵宴、朝官往往因庭蘭以見琯。自是亦大招納貨賄、姦贓頗甚。（中略）憲司又奏彈董庭蘭招納貨賄。琯入朝自訴。上叱出之。因歸私第、不敢關預人事。諫議大夫張鎬上疏、言、琯大臣、門客受贓、不宜見累。二年五月、貶爲太子少師、仍以鎬代琯爲宰相。（『舊唐書』巻一百一十一、房琯傳）

また『資治通鑑』巻二百一十九にもほぼ同様の記載がある。

房琯性高簡、時國家多難、而琯多稱病不朝謁、不以職事爲意、日與庶子劉秩、諫議大夫李揖、高談釋老、或聽門客董庭蘭鼓琴、庭蘭以是大招權利。御史奏庭蘭贓賄、丁巳、罷琯爲太子少師。

（7）史臣曰、（中略）琯登相位、奪將權、聚浮薄徒、敗軍旅之事、不知機而固位、竟無德以自危。

（8）琯有遠器、（中略）而不切事。時天下多故、急於謀略・攻取。帝以吏事繩下、而琯爲相、遽欲從容鎭靜以輔治之。又知人不明、以取敗橈、故功名隳損云。贊曰、（中略）原琯以忠誼自奮、片言悟主而取宰相。必有以過人者。用違所長、遂無成功。然盛名之下、爲難居矣。

（9）唐書房琯傳、上皇入蜀、琯建議請諸王分鎭天下、其後賀蘭進明以此譏之肅宗、琯坐是卒廢不用、世多憫之。豫讀司空圖房太尉漢中詩云、「物望傾心久、兇渠破膽頻。」注謂、「祿山初見分鎭詔書、拊膺歎曰、吾不得天下矣。非琯無能畫此計者。」蓋以乘輿雖播遷、而諸子各分統天下兵柄、則人心固所繫矣、未可以强弱爭也。今唐史乃不載此語。圖博學多聞、嘗位朝廷、且修史、其言必有自來。夫身以此廢、而功之在時乃若是、於其人之利害豈不重哉。惜乎史臣不能爲一白之也。（宋、蔡厚居著『蔡寬夫詩話』二十、郭紹虞校輯『宋詩話輯佚』所收）

（10）『全唐詩』（巻六百三十四）司空圖の「句」の項には、『困學紀聞』からの引用としてこの二句を掲載している。

（11）以司空表聖之言觀之、則琯建此議可以破逆胡之膽。新唐書采野史稗說、而不載此語。唯程致道著論發揚之。（南宋、王應麟『困學紀聞』巻十四）

（12）北海太守賀蘭進明詣行在、上命琯以爲南海太守、兼御史大夫、充嶺南節度使、琯以爲攝御史大夫。進明入謝、上怪之、進明因言與琯有隙、且曰、「晉用王衍爲三公、祖尚浮虛、致中原板蕩。今房琯專爲迂闊大言以立虛名、所引用皆浮華之黨、眞王衍之比也。陛下用爲宰相、恐非社稷之福。且琯在南朝佐上皇、使陛下與諸王分領諸道節制、仍置陛下於沙塞空虛之地、又布私黨於諸道、使統大權。其意以爲上皇一子得天下、則己不失富貴、此豈忠臣所爲乎。」上由是疏之。（『資治通鑑』巻二百一十九）

（13）清、董誥等編、上海古籍出版社、一九九三年十一月。

（14）『唐代の詩人―その傳記』（小川環樹編、大修館書店、一九九四年、初版は一九七五年）の「杜甫」（黑川洋一著）の〔注〕十三に「當時の肅宗朝には房琯を中心とする玄宗系の官僚の一派と、賀蘭進明・第五琦らの經濟官僚の一派があって對立していたが、董廷蘭の收賄事件は房琯を失脚させるために反房琯派によって捏造されたものであったらしい。」との指摘がある。派閥の對立との見方であるが、論者は根本に經濟政策と戰爭政策についての對立があったと考える。

（15）乾元二年、以本官加同中書門下平章事。初、琦以國用未足、幣重貨輕、乃請鑄乾元重寶錢、以一當十行用之。及作相、又請更鑄重輪乾元錢、一當五十、與乾元錢及開元通寶錢三品竝行。既而穀價騰貴、餓殣死亡、枕藉道路、又盜鑄爭起、中外皆以琦變法之弊、封奏日聞。（『舊唐書』巻一百二十三、第五琦傳）

（16）子曰、不得中行而與之、必也狂狷乎。狂者進取、狷者有所不爲也。（『論語』子路篇）

（17）拙稿「杜甫と房琯（一）―杜甫「祭故相國清河房公文」譯解―」（『長野縣短期大學紀要』第五十三號、一九九八年十二月）參照。